

学生海外調査研究	
ニジンスキーとその振付作品に関する資料調査	
氏名	佐藤 真知子
	比較社会文化学専攻
期間	2017 年 10 月 7 日～2017 年 10 月 17 日
場所	イギリス（ロンドン）
施設	大英図書館、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館 ブレイス・ハウス、トリニティラバン・コンセルヴァトワール・オブ・ダンス附属図書館

内容報告

1. はじめに

1.1 研究の背景

報告者は 20 世紀初頭に活躍したロシア人バレエダンサー・振付家である、**ヴァーツラフ・ニジンスキー** [Vaslav Nijinsky 1889?-1950] の振付作品に注目して研究を行っている。

バレエは 20 世紀初頭に登場した、セルゲイ・ディアギレフ率いるバレエ・リュス[Ballets Russes du Sergei Diaghilev 1909-1929]（以下、バレエ・リュスと記す）の活躍によって、芸術として見なされるようになった。このロシアのバレエ団は、主にパリを中心に活動を行い、同時代の芸術家らを集結した作品創作により、音楽や美術といった諸芸術分野、さらにはファッションにも多大な影響を与えた¹。ニジンスキーはその初期に活躍した、男性バレエダンサー兼振付家である。

ニジンスキーは卓越した技能を持つ男性舞踊手として、一世を風靡したことで知られる。一方、彼の振付は、脚の外旋や上昇志向といった、バレエ特有の動きを廃した作品の創出を行い、そこには既成の概念にとらわれない、新しい舞踊を創造しようとする意識が見てとれる。

ニジンスキーはバレエ・リュスに在籍している間、4 つの振付作品を手がけている²。特にニジンスキーの 1 作目の《牧神の午後》（初演 1912 年、パリ）や、3 作目の《春の祭典》（初演 1913 年、パリ）は、バレエ史上最も激しい賛否両論の大騒動が巻き起こったとして知られる。ニジンスキーの振付作品は、数回の公演の後にレパートリーから外れ、忘れ去られたものが大半であったが、1980 年代に復刻がされ始め再評価が進んでいる。

1.2 問題の所在

ニジンスキーの振付に関する、従来の研究での課題は、大きく分けて次の 2 点がある。

① ニジンスキーの振付のどのような部分が議論を呈したのか、研究蓄積が十分でない。

ニジンスキーの振付作品のパリでの反響は、これまで主として初演時に劇場内に居合わせた観客の振る舞いを描写した、芸術家らの回想録や新聞記事により伝えられてきた。しかしながら、当時発表された批評文が広く実証的に検討された例は少なく、さらには舞踊的な視点から詳しく論じられることはほとんどない。ニジンスキーの振付作品は、公演が終了したのち半年以上も批評文が発表され続けられている点ひとつを見ても、パリの人々に与えたインパクトはかなりのものであったと考えられ、その反響の一端はニジンスキーの振付が担っていたとも指摘される。そのため舞踊的な視点から、この作品がどのように議論されたのかという点が、より実証的に明らかにされる必要がある。

② 振付家自身がどのような思想のもと作品を創造したのかについては、これまでほとんど研究がなされていない。

今日ではニジンスキーの振付作品は、バレエにおけるモダニズムが幕をあける契機となった³と評されるものの、振付家自身がどのような思想のもとに作品を創造したのかは、これまでほとんど研究がなされていない。ニジンスキーは自らの手記の中で、新しい舞踊の理論を創造した、と述べたり、インタビュー記事の中で、自分の振付は、身振りの実験であるといった言説を残したりしている。そのため作品を振り付けるにあたり、何らかの意図があった可能性が示唆され、ニジンスキーの振付思想の解明が期待される。

1.3 研究の目的と意義

本調査では、博士論文の基盤となる、以下に示す一次資料の収集を最大の目的とした。ニジンスキ

ーに関する一次資料は、日本国内での所蔵は限られており、海外の所蔵機関もインターネットでの一般公開をしていない。そのため現地に赴いて調査を行なうことが必要不可欠であった。これらの内容については、最終的に報告者の博士論文で詳細に検討する予定である。

① ニジンスキー振付作品に対する当時の反響を示す資料の調査

ニジンスキーの振付の特徴は、当時の観客の反響からもうかがい知ることができる。そして当時の観客の反響を知るためには、批評文、ならびに観客の著作物やコレクションの検討といった方法が考えられる。これまで報告者は、主にフランス国会図書館のデジタル・アーカイブを使用して、初演当時の批評文を収集してきた。しかしながら、ここでは当時発表された全ての批評文が掲載されているわけではなく、号が抜けている場合も多くある。そこで、バレエ・リュスやニジンスキーに関するコレクションを所有している機関に出向いた上で、批評文の調査を行うことが必要である。

② ニジンスキーが記した舞踊譜および振付の復刻に関わる資料の調査

ニジンスキーは自身の作品を、舞踊譜と呼ばれるスコアに残している稀有な振付家でもある。舞踊作品はその特性上、その作品自体が忘れ去られて後世に残されていない場合や、伝承されていくうちに内実が変化し、振付の原型をうかがい知ることができない場合が多くある。

しかしながらニジンスキーの場合は、独自の記譜法を考案した上で、『牧神の午後』の舞踊譜を書き残している。この舞踊譜は、現在世界中で使用される「ラバノテーション」という記譜法に翻訳され、出版されている⁴が、振付家の考案した振付の原型により迫るためには、オリジナルのスコアを入手する必要がある。このスコアは、現在イギリスの大英図書館が所蔵している。

なお、舞踊譜が残されていない他の3作品については、舞踊研究家であるミリセント・ホドソンが、復刻を手がけている。この復刻に関わる資料は、イギリス（ロンドン）のヴィクトリア・アンド・アルバート博物館やアメリカ合衆国（ニューヨーク）のダンス・ノーテーション・ビューローが所蔵している。

③ ニジンスキー自身の言説に関わる資料の調査

ニジンスキーは、弁達な芸術家ではなかったため、彼の考えが文章化されている例は多くない。しかしながら彼のインタビュー記事は、各国の新聞に掲載されることが度々あり、同時にバレエ・リュスの他の芸術家や、彼の振付助手も務めた妹のブロニスラヴァ・ニジンスカ [Vronislava Nijinska 1891-1972] が、ニジンスキーの言説や出来事を語っている場合もある。ニジンスキーの振付に対する考え方を知るためには、まずは新聞・雑誌記事にインタビュー記事が掲載されていないかを調査をする必要がある。

2. 調査の方法と対象

本調査は、イギリス（ロンドン）の図書館ならびに資料館で行なった。ニジンスキーの振付作品は、パリだけでなくロンドンでも公演された実績があり、両都市は歴史的にみても文化的交流が多かったため、バレエ・リュスに関するコレクションが多くある。今回の訪問先は、以下の通りである。なお上記 1.3 で示した調査対象資料の、所有状況を併記した。

A) 大英図書館 [British Library] (調査内容：②他)

英国の国会図書館である大英図書館は、世界中の文字資料を中心とした膨大なコレクションを所蔵している。今回は「希少 音楽コレクション (Rare Music Collection)」よりニジンスキー直筆の『牧神の午後』の舞踊譜を、「直筆原稿コレクション (Manuscript Collection)」よりニジンスキーのサインの入った書簡について調査を行なった。

B) ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館 ブレイス・ハウス [Victoria and Albert Museum Blyth House] (調査内容：①, ②, ③他)

ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（以下、V&A と略す）は、芸術とデザインを専門分野とする、豊富なコレクションを備えている。特にハマスミスに位置する附属アーカイヴである「ブレイス・ハウス」には、「演劇とパフォーマンス」に特化したコレクションがある。今回はこちらのアーカイヴに訪問し、バレエ・リュスの愛好家であったフランス人女性画家 ヴァランティヌ・グロスのコレクション、ならびにニジンスキーに関するリサーチ・ボックス、ニジンスキー振付作品の復刻を手がけた舞踊研究者ミリセント・ホドソンらの研究資料について調査した。

C) トリニティ・ラバン・コンセルヴァトワール・オブ・ダンス附属図書館 [Trinity Laban Conservatoire of Music and Dance, Dance Library and Archive] (調査内容：③他)

ラバンセンターは、世界でも有数のダンス総合教育機関であり、ダンスに関わる研究書が多く所蔵されている。現在外部の者の入館は制限されているが、資料調査の旨を事前に問合わせたとこ、訪問を快く了承して下さった。今回はこの図書館が所蔵している舞踊書籍の閲覧を行なった。

※ 本調査は当初、上記のイギリスの諸機関に加え、舞踊作品を表記・保存する非営利団体である、アメリカ合衆国（ニューヨーク）のダンス・ノーテーション・ビューローにも訪問を予定していた。ここには報告者が研究テーマとしている、ニジンスキーの振付作品の復刻に関わる資料が保管されている。今回は司書の方のご好意により、それらの資料を所有者の承認を得た上で日本に輸送してくださった。さらに財団は移転に伴い、一時閉館することとなった。そのため今回は、調査先に設定していた本機関の訪問を見送ることとし、イギリスのみの調査に変更した。

3. 調査内容と成果

3.1 ニジンスキー振付作品に対する当時の反響を示す資料の調査

3.1.1 ファンの言説

ヴァランティヌ・グロス（新姓ヴァランティヌ・ユゴー：1887-1968）は、フランスのイラストレーター、画家、研究家であり、バレエ・リュスの熱心なファンであった。彼女は1909年からパリで始まった「セゾン・リュス」⁵の時代はまだ学生であった。伝えられるところによると、彼女は1909年から1914年までに、パリで行われたバレエ・リュスの公演に全て出掛けたほど、頻繁に劇場に足を運んでいたと言われる。画家としては、1909年から1920年にかけて、リハーサル風景やパフォーマンスの様子を描いたスケッチを数多く手がけ、新聞や雑誌に多く発表した。彼女のパステル画は、1913年のシャンゼリゼ劇場オープニング・シーズンに展覧会が行われた。

V&A ブレイス・ハウスが所蔵する、ヴァランティヌ・グロスのコレクション(The Valentine Gross Collection)には、彼女が収集した新聞・雑誌記事、書簡、メモ、手書きおよびタイプ打ち原稿、写真、スケッチ、イラストなどが含まれている。今回は特に文字資料に注目し、資料の閲覧・複写を行った。

このコレクションの中でも特に興味深い資料は、グロスがニジンスキーのオマージュとして執筆した原稿である。この原稿はニジンスキー没年の1950年に執筆されており、何度も書き直しがされ、最終的に10ページ程のタイプ打ち原稿にまとめられている。この原稿の前半には、ニジンスキーのダンサーとしての輝かしい活躍が描かれ、後半には彼の振付作品に関する様々なエピソードや思い出が記された、回顧録のような形態となっている。グロスは、物議を醸したニジンスキーの作品群がいかに創造的であったかについて言及し、終盤では「ニジンスキーは偉大な振付家の力を持っていたと心から信じている」と記している。ここから、1950年においても、ニジンスキーの振付家としての評価はそれほど高いものではないことが推察され、同時にグロスがいかにニジンスキーを愛しんでいたかがよくわかる。

3.1.2 批評文、ならびに新聞・雑誌記事

先述のグロスのコレクションには、バレエ・リュスをはじめ、ミュージック・ホールなどの舞踊芸術に関する、膨大な量の新聞・雑誌記事の切抜きが含まれていた。今回はこれらのコレクションの中から、ニジンスキーとその振付作品に関するフォルダを中心に資料を閲覧し、202件の新聞・雑誌記事と、67件の図版の複写を得た。

さらにV&A ブレイス・ハウスが独自に編成したと思われる、ニジンスキーに関するコレクションの中にも、発行年代別に分類された新聞・雑誌記事が膨大に収められていた。こちらは特に、ニジンスキーがバレエ・リュスを離れた1920年代から1950年代の資料が充実している。今回はそのなかから、133件の新聞・雑誌記事と、図版9件の複写を行った。

今回複写をおこなった資料は、報告者がまだ検討していない年代のものが多く、未検討の資料が大半を占めており、大きな成果となった。ここで注目されることは、「ニジンスキー特集」のような記事が散見される点であり、彼がバレエ・リュスで華々しいキャリアを築いていた1910年代、没後の1950年代に、特集が組まれる傾向があったことを確認した。今後は、これらの特集記事を中心に、他の新聞・雑誌記事の内容を精査していきたい。なお、グロスのコレクションには、図版部分のみが切り抜かれて文章が切れているものや、日付の不明な記事も多く含まれていた。一見したところ、V&A ブレイス・ハウスがまとめたニジンスキー関連記事のコレクションと、重複している資料があると思われる。今後は2つのコレクションを付き合わせて、引き続き新聞記事の内容を検討していきたい。

3.2 ニジンスキーが記した舞踊譜および振付の復刻に関わる資料の調査

3.2.1 《牧神の午後》の直筆の舞踊譜⁶

《牧神の午後》は、ニジンスキーが彼独自の記譜法を使用し、書き残した唯一の作品である。この譜面は、現在世界で広く使われている「ラバノテーション」という舞踊記譜法により、書き起こされた譜面が出版されている。今回はその原本であり、ニジンスキー直筆の鉛筆書きマニスクリプト(直筆原稿)を、大英図書館において閲覧することができた。

大型の赤い表紙が付けられたノートには、鉛筆書きの譜面が綴じられていた。舞踊譜にはさまざま

な表記法が存在するが、このスコアは音楽表記法を採っている。報告者は昨年度の資料調査で、「ニジンスキーの手記」の中に書かれた舞踊譜⁷の存在を確認したが、それと比較しても、このスコアは格段に丁寧に書かれていることがわかる。細部を観察すると、部分的に消しゴムで消して書き直したような点はあるものの、そのような形跡はほんの数カ所に留まる。そのためこの譜面は、何度も推敲した後の清書のような印象を受けた。

今回、この資料は図書館内での個人撮影が許可されなかったため、有料の複写サービスに申し込み、後日データを送付してもらおう手続きをとった。しかしながら、複写依頼後およそ1ヶ月を経過した現在でも、未だ複写データは届いていない状態にある。領収書はエアメールで届いたものの、対応が遅れているとの記載があった。スコアの写しが届き次第、その詳細を分析していきたい。

3.2.2 《遊戯》、《春の祭典》、《ティル・オイレンシュピーゲル》の復刻資料

舞踊研究者のミリセント・ホドソンと、美術史家のケネス・アーチャーは、ニジンスキーの《春の祭典》をはじめとする振付作品の復刻を行なった業績を持つ。今回は V&A ブレイス・ハウスにて以下のフォルダの閲覧を希望していたが、作業時間の関係上調査を進めることができず、残念ながら次回の調査に持ち越すこととなった。閲覧を希望していた資料は、次の通りである。

《The Millicent Hodson and Kenneth Archer, Ballets old and new collection》

- 1) *Jeux* by Vaslav Nijinsky (GB 71 THM/412/3/1)
- 2) *Le Sacre du Printemps* [*The Rite of Spring*] by Vaslav Nijinsky (GB 71 THM/412/3/2)
- 3) *Till Eulenspiegel* by Vaslav Nijinsky (GB 71 THM/412/3/3)
- 4) Newsletters and Interviews (GB 71 THM/412/6/2)
- 5) Writings and Lectures by Millicent Hodson (GB 71 THM/412/6/3)

3.3 ニジンスキー自身の言説に関わる資料の調査

3.3.1 記事

既出の 3.1 で触れた V&A ブレイス・ハウス所蔵の新聞・雑誌記事のなかで、ニジンスキーの言説に関わるものがあるかを調査した。その結果、ニジンスキー自身の名前が付された 3 点の記事 があることを確認した。そのうちの一つはフランス人作曲家への感謝を綴った手紙、一つは自分の日常について語ったもの、そして最後はバレエ・リュスについて語ったものである。ただしこの時代は、インタビュー記事が、聞き手（インタビュアー）の名前で発表されることも多い。他にニジンスキーの言説に関わる記事がないか、内容の検討を行なっていきたい。

3.3.2 書簡

大英図書館が所蔵する、ニジンスキーのサインの入った書簡を閲覧した⁸。この書簡は 1910 年 10 月に、作曲家のレナルド・アーン⁹から、フランス人興行師であるガブリエル・アストリュク¹⁰宛に送られたものであった。この手紙は連名で書かれており、手紙の最後にはニジンスキーをはじめ、セルゲイ・ディアギレフ、レオン・バクスト、ジャン・コクトーのサインが記されていた。今回はこの資料の撮影や複写依頼が許可されず、日本に持ち帰って詳細に検討することは叶わなかったが、この手紙のおおよその内容は、準備中のバレエ作品の上演の可能性について問うものであった。

手紙の文面、差出人、連名で書かれている人々、投函時期などから、この手紙は 1912 年に上演されることとなるバレエ《青神》(*Le Dieu Bleu*) の、初期の準備段階のものであると推察される。この作品では、主役の青神をニジンスキーが踊り、衣装をバクストが、台本をコクトーが、音楽をアーンが担当している。取り立てて注目するような内容ではなかったが、ここからは、ディアギレフをはじめとするバレエ・リュスの面々がアストリュクの助言を重要視し、作品発表の 2 年ほど前から互いに意見を出し合って、作品の準備をしていたことがうかがえる。ニジンスキーが振付家としてデビューする前の活動の一端を知ることができた。

3.4 その他

今回閲覧した資料の中でも興味深いもののひとつに、ラバン・センターに所蔵されていた、「ニジンスキーの振付の革新性」について論じた博士論文が挙げられる¹¹。この論文で主張されていることは、ニジンスキーの振付は、劇場舞踊を活性化させただけでなく、コンセプトを拡張させ、バレエとモダンダンスという両ジャンルの橋渡しをした点が述べられている。ニジンスキーの振付作品に焦点が当てられ、その舞踊史上での位置付けが検討されている点で貴重であり、報告者の研究の直接的な先行研究となる可能性がある。

この研究は、ニジンスキーをはじめ、同時代の様々な芸術家の言説、他の研究者らの見解を整理している点で資料的価値が高い。しかしながら「ニジンスキーの振付」に焦点を当てた研究でありながら、あくまで文献研究の手法に依拠しているため、ニジンスキーの振付それ自体の具体的な検討はなされていない。この課題点を補い、精緻化させるような研究を行ないたい。

4. まとめと今後の課題

本調査は、ヴァーツラフ・ニジンスキーとその振付作品を中心に、一次資料の収集・分析を行うことを目的とした。本調査で得た資料を詳細に分析し、その結果をまとめ公表するにはまだ多くの時間が必要であるが、一次資料の収集という点については、おおよそ目的は達成されたと思われる。達成されなかった点としては、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館で閲覧予定であった、ニジンスキー振付作品の復刻に関わる資料群が、閲覧できなかった点が挙げられる。今回は作業時間が限られており、調査は手付かずで終わってしまったため、これらの資料については次回の調査で検討したい。

本調査で得られた資料は、筆者の博士論文の土台として必要不可欠であり、特に第2章、第3章で中心的な役割を果たすであろう。今後は①当時の観客や批評家はどのようにニジンスキー作品を見ていたのか、②振付家が作品創作に当たってどのような点を重要視し、何を主張しようとしたのかを明らかにしていきたい。また本調査の成果の一部は、今年度12月に開催される舞踊学会大会にて発表する予定である。さらに、『舞踊學』への投稿を考えている。

5. 謝辞

本調査を遂行するに当たり、ご指導をいただきました指導教員の猪崎弥生先生、ならびに準備段階からご協力、ご助言いただきました皆様に、心より御礼申し上げます。

本調査は、国際的な女性リーダーの育成を旨とする、お茶の水女子大学「学生海外調査研究」プログラムの助成を受けて実現したものであり、現地に赴いての調査を必要とする本研究に対し、貴重な機会をいただきましたことに深く感謝いたします。

注

1. Garafora, L. (1998) *Diaghilev's Ballets Russes*. Da capo press.
2. ニジンスキーがバレエ・リュスに所属している間に手がけた振付作品には、以下の4作品がある。
《L'Après-midi d'un Faune》(牧神の午後): 初演 1912 年、パリ
《Jeux》(遊戯): 初演 1913 年、パリ
《Le Sacre du Printemps》(春の祭典): 初演 1913 年、パリ
《Till Eulenspiegel》(ティル・オイレンシュピーゲル): 初演 1916 年、ニューヨーク
3. Cohen, S. ed. (2004) *International Encyclopedia of Dance*, Oxford University Press.
4. Guest, A., Claudia, J. (2010) *Nijinsky's Faune Restored*, The Noverre Press.
5. バレエ・リュスの起源は、1909 年よりパリで行われた「セゾン・リュス」という公演のなかで、ディアギレフがバレエの上演を行なったことに端を発する。そこで人気を博したために 1911 年に正式にバレエ団が結成される。
6. Nijinsky, V. *Nijinsky Score. Choreographic score of the ballet by Vaslav Nijinsky to Debussy's Prelude L'après-midi d'un Faune*; Budapest, August- September 1915. Autograph (大英図書館所蔵)
7. ———, *Nijinsky Diaries 1917-1919*. (ニューヨーク公共図書館上演芸術資料館所蔵)
8. *Ballets Russes Autograph Letter Signed by Reynald Hahn to the ballets impresario Gabriel Astruc, also signed by Vaslav Nijinsky, Sergei Diaghilev, Leon Bakst, and Jean Cocteau, 27 October 1910*. (大英図書館所蔵)
9. HAHN, Raynaldo (1875?-1947): ベネズエラに生まれ、フランスで活躍した作曲家である。バレエ・リュスでは《Le Dieu Bleu》(青神: 初演 1912 年、パリ)の作曲を手掛けている。また 1934-1945 にはフィガロ紙の音楽批評を担当、1945 年にパリ・オペラ座の監督に就任している。
10. ASTRUC, Gabriel (1864-1938): ユダヤ系フランス人の音楽ジャーナリスト、興行師である。1903 年から 1913 年までのパリの大規模な公演を手掛けた。バレエ・リュスの興行師ディアギレフと意気投合し、フランスでの資金繰りや劇場の手配などを行った。1913 年にはパリにシャンゼリゼ劇場をオープンさせ、その柿落とし公演にニジンスキーの《春の祭典》を上演したが、資金繰りがうまくいかずに同年 8 月に破産した。
11. Hargrave, S. (1980) *The choreographic innovation of Vaslav Nijinsky: Toward a dance-theater*, Cornell University.

この論文では、以下の 2 つの用語がキーワードとして挙げられ、それぞれ以下のように規定されている。
「Theater-Dance: バレエだけでなく、モダンや経験するダンスを含む、劇場で上演される舞踊」(本報告書では、「劇場舞踊」と訳した。)

「Dance-Theater: 舞踊やマイム、彫刻的なポーズ、アクロバット、キャラクターの動きなどの芸術形式を結合させ、振付家 / 演出家が、観客とコミュニケーションを取ろうとすること。」

主要参考文献

国立新美術館編 (2014)『魅惑のコスチューム: バレエ・リュス展』TBS テレビ。

- 鈴木晶 (1988) 『ニジンスキー神の道化』 新書館.
—— (1998) 『ニジンスキーの手記 完全版』 新書館.
セゾン美術館編 (1998) 『ディアギレフのバレエ・リュス展：舞台美術の革命とパリの前衛芸術家たち：1909-1929』, セゾン美術館.
Buckle, R. (1979) *Diaghilev*. Simon & Schuster. (鈴木晶 (訳) 1984 『ディアギレフーロシア・バレエ団とその時代』 (上・下) リブレポート.)
Bullard, T. (1971) *The first performance of Igor Stravinsky's Le Sacre du Printemps*. (vol.1-3), Eastman School of Music of the University of Rochester.
Davis, M. (2010) *Ballets Russes Style: Diaghilev's Dancers and Paris Fashion*, Reaction Books.
Eksteins, M. (2000) *Rites of Spring: The Great War and the Birth of the Modern Age*, Mariner Books. (金利光 (訳) 2009 『春の祭典—第一次世界大戦とモダン・エイジの誕生』 みすず書房.)
Guest, A., Claudia, J. (2010) *Nijinsky's Faune Restored*, The Noverre Press.
Pritchard, J. and Marsh, G. ed., (2015) *Diaghilev and the Golden Age of the Ballets Russes 1909-1929*, Victoria & Albert Museum.
Scheijen, S. (2010) *Diaghilev: A Life*, Profile Books.

さとう まちこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

佐藤真知子さんは、舞踊史上偉大な舞踊家の一人として知られるヴァーツラフ・ニジンスキーの、振付家としての側面に着目した研究を行っている。彼は 20 世紀初頭に西欧で一大ブームを巻き起こした、ロシアバレエ団の花形男性舞踊手であったが、近年、振付家としての功績も再評価が進みつつある。しかしながら、ニジンスキー自身がどのような意図で作品を創作したのか、その振付で何を表現しようとしたのかという点は、これまでほとんど検討されてこなかった。

今回の資料収集を目的とする海外調査研究は、博士論文の基盤となる大変重要な調査であった。訪問したロンドンの 3 機関はどれも貴重な資料を所蔵している。ニジンスキーの舞踊譜をはじめとする、一次資料の収集をなし得たことは、博士論文の執筆に関して非常に有益な収穫であったと言える。さらにこの研究を進め、深化させることを期待している。

(お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科 (人文科学系)・猪崎 弥生)

Acquisition of materials on Vaslav Nijinsky and his productions

Machiko SATO

The aim of this short trip was the acquisition of materials on Nijinsky and his productions.

Vaslav Nijinsky [1889?-1950] is a Russian dancer and choreographer in the early 20th century, and he was known as a member of Sergei Diaghilev's Ballets Russes. His choreographies were criticized and evaluated as controversial works. However, his view on dance has not been researched yet. In order to investigate his view on dance, I collected materials on Nijinsky and his works industry.

I visited British Library, Victoria and Albert Museum Blyth House and Trinity Laban Conservatoire of Music and Dance in London, UK. I obtained dance notation of *L'Après-midi d'un Faune*, press cuttings, notes and thesis related to the choreographer and his productions. Based on these materials, I plan to clarify Nijinsky's theory of dance and the choreographic innovation.